

竹本綱大夫師・「木下蔭狭間合戦」竹中砦の段復曲への取り組み

今月（五月）の三十一日、大阪の文楽劇場で「木下蔭狭間合戦」の竹中砦の段を語るようになっております。竹中砦が文楽で最後に出たのは昭和九年、当時の紋下三代目竹本津大夫師が四代目鶴澤綱造師の三味線で勤めておられます。今回は素浄瑠璃ですけれども、約七十年ぶりの上演ということになります。

今日は二十一日ですから、文楽の東京公演のさなからです。語っておりますのは「加賀見山旧錦絵」の長局の段です。そこで、竹中砦の前に、少し長局のことをお話しします。

長局という大曲を本公演でやらせていただくのは今回で五度目になります。それでも、舞台上上がりますときは、いまだに怖くて仕方がありません。めりめりつと、盆の裏へ上がるとき「ああ、これから一時間十分の間は自分勝手な呼吸をできなくなるんだな」という恐ろしさです。大体、私は昔から舞台面が怖いって言われています。緊張のあまりそうなるんで、別に怒っているわけじゃありません（笑）。お相撲さんが土俵に上がるとき、怖い顔になるのと一緒です。

私は変声期が長かったもので、高い声が割れてしまいます。ですので、高いところは苦手だ苦手だという先入観がありました。師匠（八代目綱大夫）からは、高いところで声がひっくり返ってしまいますと、「裏へ逃げるな、逃げるな」と、裏声を使うのではなく表でやれと叱られたものです。お相撲でたとえれば、土俵際まで押されても、土俵際を親指でぐつとこらえるように、表と裏の間でやらないといけないということなんです。これは至難なことです。師匠は裏と表の間みたいな声をお使いになるのが巧みでした。声の使い方というのは、高音はこう使うんだと頭から考えないで、自然体ですーっと出せればいいんですが、凡人には中々そうはいかないものです。五十七年も太夫をやっている、初歩のときに悩んだことを、同じことを今でも悩んでいます。誠にお恥ずかしいことです。

ただ、長くやっていると、昔のようなものが付くという事は確かです、この頃は面の皮が厚くなったのか（笑）、ただ単に声が高いというだけのところは、どうにかなると聞き直っています。長局の登場人物は、ほとんど女性二人だけなので、高い声を使うことが多いんです。舞台上上がって、声を出してみて、今日は声の調子が良くないなと思うときでも、うまく潜り抜けるってことが、どうにかできるようになりました。

た。とにかくちゃんと線路の上を走ってたらいいわけで、脱線したらだめですけども。

浄瑠璃は何度もやっていたら良くなるというようなものじゃないんですけれども、それでも長局は、五回目にして、いくらかは自分のものになったかなと、なりかけているかなと。そうは思っていますけど、長局は前半が取り分けえらいところなので、今日はどうそこを乗り越えてやるうかと、いつも考えてしまいます。

マクラの「お初はそれと抜き足さし足、辺りを眺め、吐息つき、テモ恐ろしい企み事」の「吐息つき」は、心臓が止まりそうになっているお初を語らないといけません。初めて師匠に稽古していただいたときには、「それでは生ぬるい、それではお客さまには聞こえない」と言われました。目の前にいる少人数を相手にするような語り方は駄目で、劇場においてになったお客さま全員にそれを感じさせないと駄目だ、つまり、自分の肚だけで浄瑠璃を語ってはいけませんということなんです。少し大袈裟に語る、といってしまうは簡単ですが、わざとらしくなるとはいけません。今では、自分なりに「吐息つき」が、まあまあ言えるようになりました。

それから、尾上が登場するところの、「長廊下しづしづ御殿を下がる尾上」が難しい。音階だけでいえば、「しづ」「しづ」は同じことの繰り返しです。音階は変わらないんですが、同じ音階をただ繰り返しては駄目だと私も教えられています。「しづしづ」には、寂しい節が付けられています。若い時分ですから、それだけでは物足りないし、単純に繰り返しただけでは叱られるかと、稽古の時に、「しいーづ、しいーづうう」と二回目の「しづ」を少し変えて語ったんです。そしたら師匠が「動くなっ！」で、それでは節を振りすぎています。「尾上の姿が語れない」というんです。前の段で尾上は岩藤に草履で打たれています。その無念さを胸に押し隠し、打掛を持って、すーと歩いて出てくる姿、そうした尾上の姿を語らなければいけない。節にばかり気を取られて、それがわかってなかった。稽古では、先ほどのマクラから尾上が出てくるとこまで、普通なら五分程のところを、一週間くらいやらされました。結局、「もう出来へんから次、もう先行こっ」ということになってしまいました。今でも、ここの尾上の姿を十分に語れていますかどうか。

それから、尾上が死を決意して書置きを書く場面。太夫と三味線とが別なことをや

り、時には三味線と同時に彩^{あや}を付ける、住太夫風と言われているんですけれども、こも何かとやかましい箇所です。この場面が終わり、お初が尾上に葉が出来ましたと告げるあたりになりますと、やれやれといった気分になります。

長局は、お初と尾上、ほとんど女性二人だけの芝居です。この二人の語り分けも、随分と神経を使うところです。お初は召使いだれども刀の一手も使える武士の娘、主人の尾上は中老にまで出世しているけれども町人の娘、生い立ちが全く違う女性二人を語り分けなければなりません。主人の尾上が使いに行けと言う。お初は尾上の様子がどうもおかしいので行きたくない。「モ明日のことなされませぬか」「主の言い付けを背きやるか」「イエそうではございませぬ」といった何でもないような遣り取りの中にも、そうした二人の違いが出てこなければいけません。

お初が「どりゃ一走り走ってこう」と小棲引き上げて出て行きますと、六分通りは済んだようなものです。長局は、初めの三十分が難しい浄瑠璃といえます。

東京公演の直前までは、この長局を稽古しなければなりません。大曲ですの、長局だけで手一杯です。竹中砦の本格的な、三味線と合わせての稽古となると、これからのことになります。ただ、公演は二十七日までありますので、それから三日四日では、とても時間が足りません。実は、明日か明後日あたりから、長局を勤めた後で、稽古を始めようかと考えているところなんです。清二郎にしても、初めての曲ですから、ずっと自主稽古はやってます。とにかく三味線の手数が多いい浄瑠璃です。覚えるだけでも大変で、「疲れるわー」言うて（笑）、合間をみては、本を見ながら一生懸命やっています。無論、調子をうんと下げて。本当の調子でやると爪が傷んでしまいますので。ただ、竹中砦が、実に時代物らしいと申しますか、こう力で、外へ外へと押していくような浄瑠璃であるのに対して、長局の方は、陰にこもった、内に溜めて溜めて溜めてゆくとような浄瑠璃です。登場人物にしても、竹中砦は人数が多いだけでなく、色々な役柄が出てきます。もちろん、長局が西風であるのに対して竹中砦は東風ですし、その他にも様々な面で対照的な曲なので、私も清二郎も、切り替えに苦労することになりそうです。

竹中砦を語ることは、私にとりましては、師匠（八代目綱大夫）の遺言を果たすといったような気持ちもございませぬ。

昭和四十一年に国立劇場が開場して間もない頃、東京で「木下藤狭間合戦」の通し上演が企画されたことがあります。実現はしませんでしたけれども。そのとき国立劇場の山田庄一さんが師匠に「どの太夫に竹中砦をやってもらいませう」と相談したところ、「うちの織太夫にやらせませう」とおっしゃって下さったんだそうです。ところが私は昭和七年生まれですから、三代目津太夫師がなさった舞台の竹中砦を知りませぬ。師匠にうかがったところ、「わしは自分でやったことないけど、注進が三

人も出てくるからえらいぞ」と。戦況報告に注進が出てくる場面は、三味線の撥も激しくて、見ていても聞いていても面白いところなんですけれども、語る太夫の方は体力的にかなりこたえます。それが三回ある。ちなみに竹中砦では、一度目は斎藤義竜側の優勢を、二度目は苦戦を、三度目は敗北を伝えにやっています。

師匠からは筋立てやらを事細かく教えていただきましたが、その時に竹中砦の床本を譲って下さいました。この本で語れということなんです。皆さんに見ていただくこと、ここにお持ちしました。表紙にボールペンで「織太夫へ」「八世竹本綱大夫」とあります。これが私の師匠、恩師です。師匠は晩年、糖尿から眼底出血を患い、これを頂戴した当時は、もう目がかかなり悪くなっていました。毛筆を持たずと達筆で、とても立派な字を書かれた方だったんですが。ですので、ボールペン書きの署名を見せたことを知られたら、「そんな見せるな」と怒られるかもしれませぬ（笑）。

師匠に譲っていただいた本の来歴は大変なものです。表書きと裏（裏見返し）によりますと、もともとは『染太夫日記』を残した名人の六代目竹本染太夫師の師匠、越前大掾師が使っていた本なんです。六代目染太夫師は、これを五代目竹本弥太夫師——その息子が木谷逢吟さんです——に譲り、さらに弥太夫師は九代目染太夫師に染太夫襲名を祝して贈った。それを師匠の綱大夫が手に入れ、こうして私が頂戴したというわけです。師匠は「お前、竹中砦を語れ、勉強のため語れ」とおっしゃって下さったんですが、結局、師匠のご存中には語る機会がありませんでした。

ですので、竹中砦を語ることは私にとって師匠の遺言のようなものなんです。もともと、聴いたことのない浄瑠璃でしたから、勉強のしようがありませんでした。しばらくして、四代目竹本津太夫さんと先代の鶴澤寛治師匠がなさった昭和四十年のNHK録音が手に入りました。四代目津太夫さんは昭和九年に文楽で竹中砦を語った三代目津太夫師の御子息です。四代目津太夫さんは寛治師匠にお稽古していただいたようです。この録音を参考に素浄瑠璃をやりたいと大阪の文楽劇場の関係者に相談したところ、皆喜んでくれました。これは一度やっというていただかないと」「津太夫さんの音があつて、それも結構なものだけれど、後世に伝えてゆくには、やはり一度やっしておいて下さい」ということになったんです。

師匠から竹中砦の稽古はしていただけませんでした。いろいろと話をうかがうことはできました。話をうかがったというよりも、講義を受けたといった方がいいかもしれません。物語としては、斎藤義竜の軍師竹中官兵衛と小田春永の智將此下当吉の知力比べで、味方同士であるはずの義竜と官兵衛も、お互いで肚の探り合いをしている。一方、密命を受けて竹中官兵衛の陣中に入った左枝犬清は、官兵衛に欺かれ、自責のあまり切腹しますが、その切腹も此下当吉の策略の一部であったことが後でわかります。しかも切腹して瀕死の犬清とは別の犬清が戦場では大活躍しているといった

ような、とにかく非常に入り組んだ筋です。「語句も難しい。それを明快に語るだけでも厄介、並大抵ではない」と師匠はおっしゃってました。

初演はどなたですかって聞きましたら初代の豊竹麓太夫師だとのこと。ですから腹力や声の幅が要求される陣立物だと教えて下さいました。豊竹麓太夫師は「日吉丸稚桜」小牧山城中、「絵本太功記」十段目尼ヶ崎の初演者です。声域の広い、非常に豪快な芸風だったと伝えられています。尼ヶ崎でいえば、皐月の「主を殺した天罰」で、専門的にはマカンっていうんですけども、老女にあるまじき高い声を使います。「雨か涙の汐境波立ち騒ぐ如くなり」のところは、太夫も三味線も熱演するところで、大落しという節なんですけれども、その豪快さ。段切も迫力があります。どこまでも続く軍船が遙かに見え、もはや光秀の劣勢は確実な中で、光秀は千成瓢箪をダーっと切り落とし、久吉と天王山で最後の戦をしようと言って別れます。どの場面をとっても、そしてどの登場人物をとっても、卓越した豊かな表現力を持った太夫だったことをうかがわせます。

竹中砦は麓さんですから、やはり太功記十段目と日吉丸の小牧山、これをお手本にしたいと考えています。四代目津大夫さんと寛治師匠の録音は、これまでも随分と聴かせていただきました。本当に結構な演奏です。ただ、何度も聴いている内に、麓さんのものにしては、少しさらっとし過ぎているんじゃないかなとも感じたりしています。

例えば、師匠から頂戴した床本を拝見しておりますと、「座を占むればじろりと見やり」では、「じろりと」の「じ」の上に、朱で「コハ」と書いてあります。場面としては、縁の下に隠れているだろうと官兵衛に言われた犬清が出て来て、その犬清を官兵衛がじろりと見るところです。専門的に言うと、三のコハリ。ですから「じろり」でコハリのツボにちよつと触れて、官兵衛の大きさと言うか、不気味な感じを出すことになります。ただ「じろり」ではなく「じいろり」。料理でいう隠し味です。官兵衛の首は鬼一だと私は考えています。「鬼一法眼三略巻」菊畑に出てくる鬼一の「咲いた咲いた」これはちよつと歌舞伎調になりますけども、そういうじわりとした感じが、官兵衛には必要ではないかと思えます。また千里の「娘心ぞ道理なる」の「娘心」のところには、太夫の朱で「ウキン」と書いてあります。ですから「娘心」ではギンに行かないといけません。津大夫さんと寛治師匠の録音を聴かせていただき、床本を拝見していると、そういう所が、ちよつとさらつとしているような気がします。竹中砦は、ただ力任せにワーッと押せばいいというようなものではなくて、麓さんのものですから、もう少しこつこつとした浄瑠璃にしないといけないのではないかと、今はそんなふうを考えています。

先ほど竹中官兵衛の首は鬼一だと申しましたが、登場人物の首は何なのか、舞台に

かかった場合、登場人物のひとりひとりについて、どの首で遣うことになるのかといった心積りがないと、浄瑠璃は語れないものです。そこで、文雀くんは竹中砦の事を尋ねてみました。文雀くんは研究熱心ですから「狭間合戦」という作品があるのは知ってましたけれど、私とほぼ同年輩なので、実際の舞台は知りません。もし上演されることになれば、「玉男兄ちゃん」と相談して考える「なんて言っていました。ですから、これも自分なりに考えておかないといけません。

官兵衛の妻、関路は老母で語ることもできるでしょうけれど、少し色気があった方が面白いのではないのでしょうか。老女形ではあっても、少し若く語ろうかと考えています。太功記十段目の操では若すぎる感じなので、「新うすゆき物語」の梅の方あたりを狙っています。千里の首は娘（赤姫）、犬清は源太でしょう。ただ、源太だとしても、あんまり一枚目にしてはいけないように思います。竹中砦には注進を含めれば、何人も武将が登場します。その語り分けには苦労することになりそうです。春永と当吉は、小牧山に出てきますので、それが応用できそうです。首はどちらも検非違使です。斎藤義竜は「信州川中島合戦」輝虎配膳の輝虎をもじってみようかと考えています。首は文七ですが、師匠（八代目綱大夫）が言われているように、猪武者のような雰囲気も出せたらと思っています。

なにせ私は実際の舞台を存じませんので、感じがつかめないところも多々あるんですけども、私の持っているものを全てフルに活用して、やらしていただくと思っています。

「狭間合戦」では、竹中砦のお稽古は残念ながらしていただけませんが、後の壬生村の段は、八代目野澤吉弥師匠にお稽古していただきました。この段は昭和十三年に十代目豊竹若大夫師匠がなさったことがあります。浄瑠璃の色と申しましようか、それは吉弥師匠とは全然違いましたけれど、基本的な所は同じだと、そんな風に聴かせてもらいました。

壬生村のお稽古は、十代の頃だったと記憶しています。私の入門日は昭和二十一年四月一日、十四歳でしたから、太夫になって程ない時期です。吉弥師匠は近所に住んでいらつしやいましたし、昭和十年に亡くなった私の祖父、七代目の竹本源太夫とはお友達でしたので、随分とかわいがって下さいました。その頃、吉弥師匠にお稽古していただいたものに、「楠昔嘶」のどんぶりこ、「関取二代鑑」の秋津島などがあります。

「楠昔嘶」のどんぶりこには、一つ思い出があります。昭和四十六年四月、大阪の文楽公演で「楠昔嘶」が出ました。徳太夫住家の切は津大夫さんと寛治師匠でした。

竹中砦の録音を残されたお二人です。舞台稽古のとき、前へ回って聴かせてもらいまして、とりわけ寛治師匠の三味線には、本当に感動したものです。ところで、どんぶ

りこは私と野澤勝太郎さんが勤めることになりましたので、二人で先代の野澤喜左衛門師匠のところへお稽古にうかがいました。喜左衛門師匠は「あんた誰ぞに稽古してもらおうたんかい」とお聞きになりましたので、吉弥師匠にと申し上げたところ、「あの吉弥師匠、ああそうか、そりやええもん稽古してもらおうたな」とおっしゃって、それで、私やったんです。ところがあの怖い喜左衛門師匠が何も直さない。「それでええ、面白いで」っておっしゃって下さった。ですから、どんぶりこには自信があるんです。

喜左衛門師匠は大変厳しい方でしたけれど、何でもかんでも「こんなあかん」と否定するような方ではありませんでした。昭和三十五年に師匠の綱大夫が「国性爺合戦」の甘輝館を勤めておられます。録音も残ってます。この時、師匠は喜左衛門師匠に甘輝館を聴いていただけますが、喜左衛門師匠に「一から教わったのではなかったのだろうと思います」と申しますのは、昭和十九年に山城師匠が——当時はまだ豊竹古靱大夫を名乗っておられましたけれど——甘輝館をなさっているからです。三味線は四代目の鶴澤清六師匠でした。この時の甘輝館を私は聴かせていただいています。また私が太夫になる前でしたけれど、贅を尽くした立派な見台を使っておられて、房のところが珊瑚だったなんてことまでよく覚えています。師匠の演奏は昭和十九年の甘輝館の系統だと私は考えております。師匠は、山城師匠から受け継いだものを、喜左衛門師匠に聴いていただいたということなのでしょう。

竹中砦の本格的な稽古はこれからです。たった一日の素浄瑠璃公演のために、文楽で約七十年の間やってなかった曲を本興行の演目とは別に覚えなければなりません。大変な負担です。清二郎は、最近世話物とりわけ廓の物が多く、長らく時代物をやっていないから、突っ込んでやれる物、えらい物を弾きたいと思っていたと、自分の方から言ってくれました。もちろん一回の素浄瑠璃で出来るような生易しい曲ではありません。竹中砦は、私にとつて勉強ですが、息子の清二郎にとつても、これらの皆さんの期待に応えられるよう、よき修行になってくれればと思っております。

||平成十五年五月二十一日 早稲田大学文学部第五会議室||

注(1) 山川静夫『綱大夫四季』南窓社(昭和四十九年十月刊)の八代目綱大夫談「これ(引用者注||竹中砦)はねえ、不思議なことに、立派な床本をうちの師匠(引用者注||豊竹山城少掾)から頂戴して二冊持つておりました。その一冊を大分以前に津大夫さんに進呈して、いつか語って下さいと言っていたんです。それを寛治師匠が覚えて下さったんで、今回演奏されること(引用者注||昭和四十年九月NHK録音)になった訳ですが」。現綱大夫師所蔵の床本は八代目綱大夫が山城少掾から譲渡された二冊の内の一方かもしれない。

(2) 『綱大夫四季』(前出)の八代目綱大夫談「注進が三人も出てくるし、斎藤義竜というような猪武者が出て参りますから、三味線を弾く手数が多うございます」。

(文責・飯島満)